特別支援教育の扉 №５２　　令和５年６月２日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「変わることの第一歩は、知ること」

支援は、周囲の気付きと理解、子ども自身の自覚によりスタートします。先日、友達とトラブルが続いている小学６年生の知能検査を実施しました。終了後、本人が「検査結果を知りたい！」と話したので、自己理解を促すとともに、自分を変えるきっかけになると考え、保護者と学校、主治医の同意を得て検査報告をしました。

１　子どもの特性

知的発達水準は「平均レベル」であり、学年相当の学習を身に付ける力がある。

（１）得意なこと～視覚情報の理解・処理する力（視覚優位）、空間を把握する力、目で見て手で表現する力、単語に関する知識、言語理解や言葉による思考力。

（２）苦手なこと～相手の気持ちや場の空気を読み取る力、ワーキングメモリ、注意の集中と持続、聴覚的短期記憶、事務処理の速さと正確さ。

２　配慮したこと

・子どもの不安を和らげるため、保護者と学校関係者に同席してもらい、報告書を基に数値（ＩＱ）は伝えず、中学生レベルや６年生レベルの力があると伝えた。

・検査者に心を開いてもらえるように、最初に得意なこと、次に苦手なことを伝えた。

・苦手さをカバーできるように、視覚優位を生かした具体的な支援を示した。

３　一番、伝えたかったこと

・人とトラブルになる原因は、自分の考え方と相手の考え方が一致しないことが多い。友達と仲良く付き合うには、私の視点（自分はこう思う）だけではなく、相手の視点（あなたはどう思っているのか）をもてるようにする。もう一人の自分が細かく観察して、相手と考え方に違いが生じたとき、「友達の考えはこうだけど、どうしたらいいと思う？」などと、心の中で自問自答して、自分の言動を上手にコントロールすることが大切である。鳥は翼があるから空を自由に飛べる。魚はひれがあるから海を自由に泳げる。人は「想像力」（思いやり）があるから友達とケンカもするけれど仲良くなれる。「想像力」を豊かにして、友達と楽しく過ごしてほしい。

とれたて直送便

○「子どもが答えをもっている」

バーテンダーはお客様から注文があると、一杯目はグラスをお客様の右斜め前に置く。二杯目以降、置く場所をさりげなく変える。なぜならば、お客様は無意識のうちに、自分で扱いやすい位置に置いて飲むからである。お客様をよく見て、飲みやすい位置を確認しながら、二杯目以降、当たり前のようにその位置に置く。

子どもは、不安や緊張等の心の状態を問題行動で語る。子どもの問題行動は成長するための必要行動である。もし指導につまずいたら、よく子どもを見ることである。なぜならば、子どもが答えをもっているからである。指導は、子どもの的確な実態把握から始まる。

○「知ってましたか？　親子混浴、年齢引き下げ」　秋田さきがけより（令和５年５月２８日）

銭湯や日帰り温泉施設を子連れで混浴利用できる年齢を「６歳まで」に引き下げる動きが各地で加速している。県と秋田市が９歳までとしていたが、今年４月時点でいずれも６歳までに引き下げている。

お風呂屋さんに行った男の子が番台のおばあちゃんに聞いた。

男の子：「男の子はいつから女湯に入っちゃいけないの」

おばあちゃん：「女湯に入りたいと思ったときから」　**※百田　茂樹「雑談力」より**